海外で 活発にスタディーツアー

経済学部国際経済学科　「NGO論」と「海外特別研修」

▲ カンボジアで現地の子どもたちと交流（2007年・NGO論で）

広範囲でキメ細かな国際関連専門教育を行っている経済学部国際経済学科では今夏、多くの学生たちが海を越え世界中の国や地域に飛び立ち、留学やスタディーツアーに励む。なかでも発展途上国でNGO体験をする「NGO論」（指導・狐崎知己教授）、ラオスとタイ、イギリスで経済社会情勢を学ぶ「海外特別研修」（指導・飯沼健子、永島剛両准教授）は、世界を知り、日本を知る格好のフィールドワークだ。出発を前に参加学生から抱負を聞いた＝6面「学部発信」に関連記事。

NGO論　途上国の人々の暮らしと援助活動を体験学習

「NGO論」では、夏期休暇中にNGO（非政府組織）が主催するNGOのスタディーツアーに参加、途上国の人々の暮らしとNGOの活動状況を実際に体験、国際開発協力に挑む。

前期授業では欧米諸国や日本のNGOの歴史、理論、活動事例や課題、調査研究の手法を包括的に学び、取り組むテーマや参加するNGOを決める。後期授業ではスタディーツアーの体験をまとめ、理想的な援助のあり方を考える。NGOを自ら理解する夏のスタディーツアーは、なくてはならない体験となる。

今年度の履修者は15人で、渡航先はドイツ、ケニア、ウガンダ、ブラジル、メキシコ、フィリピン、マレーシア、インド、中国内モンゴル自治区、インドネシア、タイ、マーシャル諸島。視察テーマは、貧困問題、教育問題、エイズ問題、環境問題、難民キャンプ支援、先住民活動視察、農村開発運動などで、例年になく多国・地域での多岐の分野にわたっている。

坂本龍亮さん（3年次）は8月18日から10日間、ケニアを訪問する。横浜で開催されたアフリカン・フェスタで知ったNGO「キ・アフリカ」に参加。マサイ村、小学校、スラム地区を訪ねる。「昨年、海外特別研修でラオス、タイを訪問、そこで知り合ったNGOの人たちから活動の様子を聞き、ぜひ自分も参加したいと思いました」と動機を話す。

「エイズ孤児支援NGO・PLAS」に参加、ウガンダを9月に16日間訪問する早坂香里さん（同）は、小学校の教育環境の整備やエイズ撲滅の啓蒙活動を体験する。「国際ボランティアは、現地で自分の目で見ないと理解できない。授業では『援助を受ける側の声をよく聞け』とアドバイスされました」と話す。

NGO「ストリートチルドレンを考える会」でメキシコへ渡る池添早苗さん（同）、浅野真希さん（同）は路上暮らしの子供たちの現状を視察する。

池添さんは「中南米の経済」を研究テーマにする狐崎教授の影響でメキシコに関心を持つようになった。さらに授業でゲスト講師からストリートチルドレンの実態を知り「強烈な印象を受けた」ことが参加のきっかけ。

メキシコの歴史や現状など関連の下調べに励み、8月20日に出発する。「現地を見ることも大切だが、援助金がどのように使われているか、透明性はどの程度かなど『NGO』を中から見ることにも気を配りたい」。

出発を前にした前期最後の授業で狐崎教授は、テーマの確定や事前調査の重要性、さらに日々、ノートに書き留めるなどフィールド調査の手法を講義し、「本当に必要な援助はなにかを考え、援助の引き際を理解することも大切。その場限りでない中・長期的な視点を持つことを心掛けて」と強調した。

海外特別研修　経済特別区の訪問・村落に滞在も――ラオス・タイ

ラオス、タイを訪問する海外特別研修は今夏で4回目。9月1日から10日間、両国の国営、民営の工場（タイ・トヨタなど）や開発事業視察、政府機関、国際機関、NGO訪問と盛りだくさんのスケジュールが展開され、学生12人が参加する。

今回の〝目玉〟訪問地はラオス第二の主要都市サバナケート。南部の経済特別区に指定され、繊維産業を中心とした発展が期待される。そのほかラオス国立大学訪問、ナムスアン地区村落滞在（ラオス）など現地の人々との交流も予定される。「五感を使い最大限に現地の実情を吸収して」と指導の飯沼准教授。

▲ ラオスの小学校で＝昨年のラオス・タイ海外特別研修

▲ イギリスの海外特別研修（2007年）

早水良さん（2年次）は、前期授業で両国の事情を調べた。「10日間でタイとラオスの二つの国を比べられるのは魅力。特にサバナケートの活況ぶりをこの目で確かめたい」と楽しみにしている。

中本理恵さん（同）は「ラオスはアジアの中で最貧国と言われますが、人々は貧しくとも独自の文化を大切にし、誇りを持っているところに魅力を感じた。村落滞在や小学校訪問は楽しみ。ラオスの庶民の現状にふれたい」と目を輝かせた。

社会の多面性や市民の暮らし観察――イギリス

「まず自分で切符を買ってみよう」―ロンドンでの歩き方から実習が始まるのがイギリスの海外特別研修（8月26日から9日間）。移動にはできるだけバスや地下鉄を使い、市内の様子や人々の息づかいに触れることも学習のひとつ。今回は「食」をテーマに据え、英国ミツカン社訪問のほか食文化や外食産業の現状を視察する。そのほかレディング、オックスフォード両大学の訪問も。

参加学生10人のうち4年次生3人に話を聞いた。笠原怜子さんは「現地企業などは個人旅行では行けないところ」と研修旅行の魅力を話す。更科愛さんは「就職活動で経済の動きに関心を持つようになった。これから日本でも考えられる外国人労働者の問題を調べてみたい」。また「女性の労働事情や雇用支援に関心がある」坪井春華さんは「企業やレストラン訪問で英国に働く女性たちの姿を観察し、日本と比較する」のが研修の目的だ。

永島准教授は「『自分はこれを見る』というビジョンやテーマを携えて現地に入ることが大切。イギリス社会の多面性に触れることで〝モノの見方〟や問題発見能力を養ってほしい」と期待する。

学生部／夏の海外研修・国際交流奨励生決まる

▲ 奨励金を受ける相原さん

海外での視察・調査やボランティア活動、スポーツ大会など体験旅行を希望する学生に奨励金を支給する学生部の海外研修・国際交流奨励制度の08年度前期奨励生に5団体（14人）と2人が決まった。

今夏、2週間中国を訪問する相原みなみさん（文2）は、日中学生交流団体が主催する復旦大学（上海）の学生との討論会に参加する。

「テーマは若者の労働観やナショナリズムなどで、中国のいまの学生の考えを知るいいチャンス。興味は尽きません」と話す。

そのほかの奨励生の氏名（敬称略）・渡航先・目的などは以下の通り。

▽稲村友美、宮村麻衣（以上法3）＝インドネシアでNGO活動▽高梨美沙都（商3）、飯野瞳（法2）＝インドでボランティア活動▽青木雄太（法3）、山口倫（商2）＝カンボジア、タイでボランティア活動▽杉町亮、宮武真央、本田美咲（以上文4）＝アンコールワット遺跡群訪問▽皆川美帆、波田野真衣、大畑旭世、古谷麻里香、蛭田綾（以上経済4）＝カンボジアで孤児院を訪ね日本語指導。ラオスで国際経済学科・海外特別研修のフォローアップ▽清野裕彰（経済4）＝オーストラリアでオーストラリアンフットボールの日本での普及活動を考える。

米ネブラスカ大リンカーン校などに16人

2008年度中期留学プログラムの後期参加者が決まった。

参加者は米ネブラスカ大学リンカーン校（留学期間・8月23日～12月15日）に6人、ニュージーランドのワイカト大学（同・9月6日～12月21日）に4人、豪ウーロンゴン大学（同・9月6日～12月21日）に6人のあわせて16人＝表・右。

短期留学の夏期留学プログラム参加者は別表・左のとおり。

都合により写真を掲載いたしません

▲ 大林守国際交流センター長を囲んで中期留学生のみなさん

2008年度中期留学プログラム（後期）

ネブラスカ大学リンカーン校
栗田ゆかり（経済3）
天方　健介（経済2）
山崎　真実（　〃　）
田中　優実（経営2）
中村　研治（文　3）
坂下　裕一（二部経済2）

ウーロンゴン大学
飯島　美香（経済2）
藤田　壮（　〃　）
小川　浩平（　〃　）
岡田　拓也（文　3）
渋谷　純子（文　2）
飯塚　野亜（　〃　）

ワイカト大学
○○　○○（法3）
大塚奈緒子（　〃　）
渋谷 澄子（商2）
菊池 慎也（文2）

（敬称略）

08年度夏期留学プログラム参加者（敬称略）

ブリストル大学（イギリス）
8／2～9／1
岩波　強（経済3）
千葉　俊輔（経済2）
天野　文紀（　〃　）
石川　将也（経済1）
諸田　和昌（経営2）
石原健一郎（　〃　）
及川　麻衣（文　3）
林　三貴江（　〃　）
矢板　瑞恵（　〃　）
鈴木健太郎（　〃　）
細野　千晶（文　2）
平林　郁（　〃　）
川﨑祐太郎（　〃　）
佐藤明日佳（　〃　）
福羅　太成（　〃　）
老後　直輝（　〃　）

大平　哲也（文　2）
服部　悠（文　1）

サスクェハナ大学（アメリカ）
8／2～20
岩野　祐子（経済1）
船山沙矢子（　〃　）
小谷　一成（経営2）
大貫　千穂（商　3）
山根　裕史（　〃　）
大石　暁広（　〃　）
北諧　政徳（　〃　）
奥冨　裕智（商　2）
藤井　洋子（文　3）
木浦原由佳（　〃　）
神近　学（文　2）
関口　泰晴（　〃　）
遠藤　晋哉（　〃　）
小林　美樹（文　1）

岩城　綾子（ネット情報3）

マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルク（ドイツ）
8／2～24
近藤　俊（経済2）
鈴木　瑞歩（商　2）
井上　容一（　〃　）
大屋登美雄（文　4）
宇田川紫衣那（文2）
橋場慎之介（　〃　）
福地　由実（　〃　）
石井　新菜（　〃　）
那須　円香（　〃　）
冨山　有三（　〃　）
太田　法子（　〃　）
永澤　梨絵（文　1）